

(対象事業：平成16年度文化庁芸術拠点形成事業)

事業名：ミュージアム・クルーズ・プロジェクト（市内全学校招待美術館オリエンテーリング）

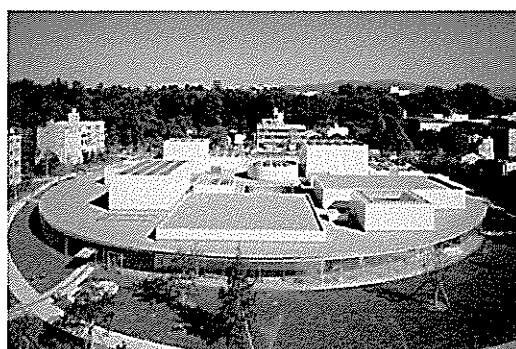
事業者名：金沢芸術創造財団 金沢21世紀美術館
連携事業館名：金沢市教育委員会、金沢美術工芸大学、

住所：石川県金沢市広坂1-2-1

TEL：076-220-2800

FAX：076-220-2802

HPアドレス：www.kanazawa21.jp



①施設概要

金沢21世紀美術館は、「新しい文化の創造」と「新たなまちの賑わいの創出」を目的に、平成16年10月9日にオープンした。ミュージアムとまちとの共生により、新しい金沢の魅力と活力を創出していく。

②事業の意図目的

開館記念展『21世紀の出会いー共鳴、ここ・から』の開催期間中に、金沢市内の全小中学校に通う児童生徒が美術館を来訪し、新しい美術館、そして参加型作品を含む様々な作品、表現活動と遭遇することにより、美術館と学校とが連携を深めるとともに、芸術表現を子供たちの日常に近づけ、美術館が芸術文化の創造および継承のための拠点としてより身近な存在となることを目的とするものである。

③事業概要

金沢市内95の小中学校に通う9学年、約3万8千人（参考：金沢市の人口＝約45万人、石川県＝約117万人／小学校62校、中学校26校、養護学校等7校）の児童生徒を1日2校ずつ学校単位で招待した。児童生徒は美術館の担当学芸員と図工美術の教員、また金沢美術工芸大学視覚デザイン科により共同制作されたガイドブック『まるびい（美術館の愛称）との遭遇』を手し、グループに分かれてオリエンテーリング形式で館内を探索した。また館内随所では「クルーズ・クルー」と呼ばれるサポートスタッフが子どもたちを待ち受けていて、作品鑑賞のサポートを行った。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物	テキスト	ワークシート	その他（セルフガイドマップ）
作成した報告書等			
ビデオ	（		）
冊子	（「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」記録集	・	）
その他	（		）

⑤参加者状況

参加者人数 延べ41,673人

内 訳	教員・PTA	3,004名
	小学生児童、中学生生徒	38,633名

（１）事業の実施状況

平成16年11月3日ー平成17年3月4日、ほぼ4ヶ月間のうちに、のべ57日間をかけて金沢市内にある全ての小・中学校の児童・生徒が美術館に来館した。使用したバス台数はのべ760台に及ぶ。原則としては午前、午後それぞれ一校ずつ来館、午前中の参加校は給食の時間までに学校へ戻るというスケジュール、午後の参加校の場合は給食後に学校を出発して下校時刻までに学校へ戻るという日程を組んだ。それぞれ1時間半ー2時間程度の美術館滞在であるが、人数の多い学校については二度に分けて来館するなどした。

各学校は事前に教員による美術館の視察を行ない、特に小学校の場合は必要に応じて育友会（PTA）に対して引率のサポートを依頼、児童が安全に回れるよう配慮した。また、美術館から提供されたビジュアルデータや作品資料をもとに、事前に全クラスで学習活動を行なってから来館した学校も少なくない。

児童生徒は、5・6名から10名程度までのグループを作り（グループの作り方は学校の判断による）、ガイドブックを参考にオリエンテーリング方式で館内を巡るか、もしくは（特に低学年の場合）クラス単位で担任の引率をうけて展覧会を見学した。

一方、美術館側では、市民ボランティアによるサポートスタッフ「クルーズ・クルー」を募集、延べ10日にわたる研修会の後、113名が登録し、毎日、約40名の「クルーズ・クルー」が館内の要所にあらかじめ配置し、美術館スタッフとともに活動、子供たちへの作品解説や館内案内を行なった。当初、学校側が懸念していた館内でのいたずらや事故が極めて少なかったのは、このボランティアスタッフの各所への配置と、彼らの細やかな気遣いの成果であると思われる。

終了後は各学校から寄せられた多くの感想や子供たちによる絵等を美術館内に掲示・公開したが、子供たちはスタッフの想像以上に作品の細部にいたるまで様々に観察していることが理解できた。また、週末の美術館はこれを見に来る父兄で賑わった。



（２）地域との連携について

《金沢市教育委員会や地元大学との連携》

金沢市教育委員会と美術館の担当学芸員が参加校のスケジュールを編成。図工美術の担当教員 10 名と美術館担当学芸員による「プログラム検討会」を発足、セルフガイドマップ『まるびい（金沢 21 世紀美術館の愛称）との遭遇』を監修した。制作には金沢美術工芸大学も加わり、「6 歳から 15 歳までの 9 学年におよぶ子どもたちが使いこなせるマップ作り」をテーマに、館内マップでは美術館の構造や作品展示箇所を紹介、各作品の紹介は文章と美大視覚デザイン学科の学生による作品イラストから構成し、親しみやすさとわかりやすさを演出した。

《学校との連携》

○参加校への説明およびヒアリング

2004 年 6 月、担当学芸員が 1 ヶ月かけて参加全 95 校を訪問し、プロジェクトの趣旨説明、美術館と開館記念展の紹介を行い、学校側で連絡窓口となる教員を設定するよう依頼した。ヒアリングの結果、美術館は「学校関係者向け会場事前視察」の実施を決定。1,500 人以上が参加した。

○学校によるワークシート作成

事前準備として美術館が実施した「会場事前視察」に参加した図工担当教員が、館内や作品の注意点、そして安全かつ有効に回るためのアイデアを「21 世紀美術館の案内及び注意点」という独自のワークシートにまとめて、参加各校に配付した。これを基に、各学校では子どもや教職員・保護者ボランティアに向けたワークシートを準備した。

《社団法人石川県バス協会との連携》

バスの手配や各校との交通手段に関する打合せを（社）石川県バス協会が担当した。冬場のプロジェクトということで悪天候が心配されたが、学校・担当バス会社・美術館の協力体制のもと、雪降る中でも安全な運行、来館が実現した。

（３）成果物について

《セルフガイドマップ『まるびいとの遭遇』》

サイズ：21x21(cm)、ページ：35 ページ、部数：6 万部、内容：事前学習用ガイドブック。金沢 21 世紀美術館の建築特徴、館内でのマナー、主な作品の解説、館内地図（折りたたみ式大型版は館内だけでなく別棟施設も含めた「おもてゾーン」紹介付き）。

《「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」記録集》

サイズ：A4、ページ：80 ページ、部数：2,000 部、内容：金沢市の人口約 10%、4 万人を学校ごとに新設美術館に招待するプロジェクトの意義、準備段階から現場の様子、学校での事前準備について、美術館担当者と学校関係者による座談会、参加者や関係者向けアンケートの検証など。



冊子『まるびいとの遭遇』

館内を青（ぐるぐるゾーン）と赤（まんなかゾーン）に色別。作品番号を検索すると、作品解説やイラスト、鑑賞のポイントが紹介されている。



プロジェクト記録集

写真や4コマ漫画で現場の様子を、また座談会やアンケート結果なども含め、多角的に検証。

《子どもの反応：楽しかった、また来たい》

参加児童生徒向けアンケートによれば、美術館に関する既存のイメージは「絵や彫刻がある」「静かでつまらないところ」であったが、今回の来館で「触ったり乗ったり中に入れる作品」があることに驚きつつも、楽しい時間を過ごしている様子が伝わってくる。時間が足りなかったから、新しい作品を見たいから、家族と一緒に気に入りの作品を見たいから「まるびいにまた来たい」という声が圧倒的に多かった。

冊子『まるびいとの遭遇』の巻末には、切り取って使える「もう1回券」という子ども向け無料招待券を2枚印刷したところ、最終的に6,708枚を回収している。単純計算で約5人に1人が美術館の「リピーター」になったことが言える。利用状況をみると、プロジェクトに参加してすぐの週末、そして子ども向けイベントを実施している期間の利用枚数が多かった。

《先生の反応：芸術に触れる良い機会》

学校関係者向けアンケートによると、約8割が「大変有意義」または「有意義」なプロジェクトだったと振り返っている。「子どもたちが抵抗無く現代美術に触れていて驚いた」「子どもの感性が磨かれ刺激された」など子どもの反応に対する評価や、「美術館がサポートスタッフも含め手厚く迎えてくれた」というプログラムへの評価などさまざまである。また「これをきっかけに、学校と美術館の連携が深まれば」といった今後を期待する声が多く聞かれた。

《クルーズ・クルーの反応：この経験を活かしていきたい》

本プロジェクトでは、「クルーズ・クルー」と呼ばれるサポートスタッフが、子どもの作品鑑賞サポートや、館内案内など現場を担当した。参加約110名にアンケートを実

施したところ、「人や現代美術との出会いなど自分の世界が広がった」「子どもたちの素直な反応に感動した」など、「参加したことで有意義な時間を過ごせた」という声が多く聞かれた。また8割近くが「今回の“来館者と美術館や作品の橋渡し役”の経験を、今後活かしていきたい」と継続的な活動を求めている。



中に入ることができる彫刻作品。
「万華鏡の中にいるみたい」
「中から見える光がキレイ」
(子ども向けアンケートより)



クルーズ・クルーとの出会いを通じて、作品の不思議に気づいたり、細部に意識がいく子どもも多い。

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

金沢市内で学ぶ小中学生約3万8,000人：市の人口約1割にあたる9歳から15歳までの一世代を学校ごとに招待した結果、子どもたちが団体で、または個人で美術館を活用する動きが生まれてきている。

《新たな学校と美術館の連携》

本プロジェクトを実施したことで、美術館と市内95校とのネットワークが構築され、約2,000人の教職員が美術館に足を運んだ。「美術館で授業をしたい／市内遠足の見学ポイントに美術館をいれたい／鑑賞や制作活動を館内で行いたい／学芸員に授業のアドバイザーとして来校してもらいたい」といった様々な要望が美術館に届いている。

《子どものリピーター：“まるびい”をもっと身近に》

プロジェクト終了後、金沢21世紀美術館は「こんなに家族連れが多い美術館、しかも現代美術中心の美術館は国内で見たことがない」と来館した美術館関係者に言わせるほど、子どもの姿が目立つ美術館になった。賑やかさが度を超して騒音に聞こえる日もあるが、子どもが同行している大人に対して、作品や美術館の説明をしている姿は日常風景になった。館内で開催されるワークショップやイベントへ繰り返し参加する子どもや、友だちとの待ち合わせや遊び場所に美術館を利用する姿も増えた。「子どもたちとともに、成長する美術館」としての今後の課題は、魅力的なプログラムや展覧会の実施はもちろん、効果的な子ども向け広報活動が挙げられる。